

- *パウロの切なる祈りと願いは「生きるにも死ぬにも私の身によってキリストがあがめられること」（ピリピ1：20）であった。それは、神、キリストの栄光が私によって現れることである。パウロは「どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って」神の栄光を現した。私たちは何によってキリストの栄光を現しているだろうか。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」（ガラテヤ2：20）私たちの中にキリストのいのちがある。それが自然に外にあらわれたとき、他の人が見てキリストがあがめられるのである。高齢の人や体が不自由な人が喜んで礼拝されている姿は尊く、神の栄光が現れている。また、教会は一人一人に何等かの奉仕を、と願っているが、自分に与えられた神からの賜物を用いて神のために働くことが神の栄光を現すことである。神の前では何ができるから、何をしたから素晴らしいということはない。「祈り」の奉仕はどんな人にでもできる。
- *肉体の死はすべての終わりではなく、私を造り、人生を導いてくださった神様のもとに帰る「入口」である。肉体は滅んでも霊魂は神と共にあり、イエス・キリストの十字架と復活を信じる者は、よみがえってキリストのいのちにあずかり、永遠のいのちを持つと約束されている。死の先には希望がある。パウロは牢獄の中にいて、「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」（1：21）と言った。生と死は隣り合わせ、死は永遠のいのちへの入り口。それ故、死の備えをすることは、今をどのように生きるかということと同じである。パウロの様に「死ぬこともまた益です」と確信をもって言えるかどうかは、今の生き方、どのような信仰をもっているか、どのような信仰生活を送っているかにかかっている。パウロは、「死のほうがはるかにまさっている」と言いつつ、「あなた方（ピリピ教会）の信仰の進歩と喜びのために」更に生き続けて、福音伝道と神の家族との交わりのために生き続けたいという。私たちも、「死への備え」をし、「生と死」についてもう一度考えよう。